Algorithm

pickoba

Algorithm パッケージは、 SAT_YSF_I 上で擬似コードを記述するためのパッケージです。 IAT_EX における algorithmicx パッケージ等に相当する機能を提供することを目指しています。

1. 基本的な使い方

以下を記述して Algorithm パッケージを読み込みます。

```
@require: algorithm/algorithm
@require: algorithm/style/default
```

ここでは標準 (default) のスタイルを指定していますが、Python 風、C 風のスタイルを選択することも可能です(後述)。

実際に擬似コードの組版をしてみましょう。以下はユークリッドの互除法の記述例です。 (\bmod, \gets 等は適切に定義されていると仮定)

```
1: procedure EUCLID(a, b)
+algorithmic<
                                                          r \leftarrow a \mod b
  +Procedure{Euclid}{${a, b}}<
                                                          while r \neq 0 do
    +State{${r \gets a \bmod b}}
                                                             a \leftarrow b
                                                   4:
    +While{fr \neq 0}
                                                             b \leftarrow r
                                                   5:
       +State{${a \gets b}}
                                                             r \leftarrow a \bmod b
                                                    6:
                                                          end while
       +State{${b \gets r}}
                                                          return b
       +State{${r \gets a \bmod b}}
                                                   9: end procedure
    +State{\Return{${b}}}
>
```

擬似コードは +algorithmic で括り、その中で +Procedure や +State を使って記述していきます。 これらのコマンド名はおおよそ $L^{A}T_{E}X$ の algorithmicx パッケージと揃えてあります。次ページから利用可能なコマンドを紹介します。

2. 定義されている命令一覧

2.1. 基本

行番号がつく行

+State{body} 1: body 行番号がつかない行 +Statex{body} body 2.2. ループ +For{cond}< 1: for cond do body +State{body} 3: end for > 1: for all something do +ForAll{something}< body +State{body} 3: end for > +While{cond}< 1: while cond do body +State{body} 3: end while +RepeatUntil< 1: repeat body +State{body} 3: until cond >{cond} +Loop< 1: **loop** body +State{body} 3: end loop >

2.3. 条件分岐

else 節が存在し得るため、+If は自動では閉じられないことに注意。

```
+If{cond}<
                                         1: if cond then
                                               body
  +State{body}
                                               body
+ElsIf{cond}<
                                         5: else
  +State{body}
                                               body
                                         6:
                                         7: end if
+Else<
  +State{body}
+EndIf;
```

3: else if cond then

2.4. Procedure / Function

関数名は自動的にスモールキャピタルになる。

```
+Procedure{name}{params}<
                                         1: procedure NAME(params)
                                        2:
                                              body
  +State{body}
                                         3: end procedure
>
+Function{name}{params}<
                                         1: function NAME(params)
                                              body
  +State{body}
                                        3: end function
```

2.5. コメント

コメントは挿入したい行に対応する inline-text 内に \Comment を用いて記述する。end while 等のブロックの終端行にコメントを挿入する場合は +Comment を用いる。 スタイル は +algorithmic の引数で調整可能。詳細は第5章を参照。

2.6. その他

+Require, +Ensure には行番号がつかない。

+Require{something}	Require: something
+Ensure{something}	Ensure: something
+State{\Return{something}}	1: return something
+State{\Call{Func}{args}}	1: FUNC(args)

3. コマンドの定義

Algorithm モジュール内の inline-scheme, block-scheme を利用することで独自のコマンドが定義できます。 以下では Algorithm モジュールが open されていることを仮定しています。

3.1. 一行のコマンドを定義する場合

inline-scheme: context -> bool -> inline-text -> block-boxes を使えばよいです。第二引数は行番号を付与するかどうかを示します。例えば、

```
let-block ctx +Assert it =
  inline-scheme ctx true {\keyword{assert}\ #it;}
```

と定義することで

+Assert{body} 1: assert body

のように使えます。 なお \keyword も Algorithm モジュール内で定義されているコマンドです。

3.2. ブロックを作るコマンドを定義する場合

block-scheme: context -> inline-text -> block-text -> inline-text -> block-boxes を使えばよいです。例えば、

```
let-block ctx +Block inner =
  block-scheme ctx
  {\keyword{begin}}
  inner
  {\keyword{end}}
```

と定義することで

```
+Block< 1: begin 2: body 3: end
```

のように使えます。なお、第二・第四引数の inline-text は空にすることで対応する行を非表示にすることが可能です。

4. レイアウトのカスタマイズ

Algorithm パッケージでは、**@require** で読み込むファイルを変更することで異なる表記 (LAT_FX の algorithmicx にならいレイアウトと呼称します) に変更することができます。

4.1. Python 風のレイアウト

読み込み時に

@require: algorithm/algorithm
@require: algorithm/style/python

と記載することで以下の出力を得られます(コードは第1章を参照)。

```
1: def EUCLID(a,b):

2: r \leftarrow a \mod b

3: while r \neq 0:

4: a \leftarrow b

5: b \leftarrow r

6: r \leftarrow a \mod b

7: return b
```

4.2. C 言語風のレイアウト

読み込み時に

```
@require: algorithm/algorithm
@require: algorithm/style/c
```

と記載することで以下の出力を得られます。

```
1: EUCLID(a,b) {
2: r \leftarrow a \mod b;
3: while (r \neq 0) {
4: a \leftarrow b;
5: b \leftarrow r;
6: r \leftarrow a \mod b;
7: }
8: return b;
9: }
```

5. スタイルのカスタマイズ

+algorithmic に与える第一オプショナル引数の関数によってスタイルをカスタマイズできます。調整できる項目は以下の通りです。

- font-set:fss-font-set(デフォルト値:FssFonts.default-font-set)
 - コード中で利用するフォントセットを指定。詳細は fss パッケージを参照。
- keyword-style:style list(デフォルト値:[bold])
 - プログラム中のキーワード(予約語)に対するスタイルを指定。詳細は fss パッケージを参照。
- linenumber-start:int(デフォルト値:1)

- 行の開始番号。
- indent-scale:float(デフォルト値:1.5)
 - フォントサイズに対するインデントサイズの比。
- linefeed-scale:float(デフォルト値:1.2)
 - フォントサイズに対する行送りの比。
- prefixf:context -> int -> inline-boxes(デフォルト値:default-prefixf)
 - 各行のプレフィックス (行番号表示) をカスタマイズするためのフック。 行番号を 非表示にしたい場合はここに Algorithm.null-prefixf を指定。
- commentf: context -> inline-text -> inline-boxes (デフォルト値: default-commentf)
 - コメントをカスタマイズするためのフック。
- indentrulef : context -> length -> deco-set(デフォルト値: fun _ _ -> VDecoSet.empty)
 - インデントルールをカスタマイズするためのフック。Algorithm.simple-indentrulef に 設定するとインデントルールが引かれる。今後仕様変更の可能性あり。

実際にはこれらに set- を前置した関数を並べることでスタイルを指定します。例えば以下のようにカスタマイズできます *1 。ここでも Algorithm モジュールが open されていることを仮定しています。

1 SATySF_I v0.1.0 がリリースされた後に、ラベル付きオプショナル引数を利用する形に変更する予定です。

- 10: $s \leftarrow 0$ // comment
- 11: for $i \leftarrow 1, n$ do
- 12: $s \leftarrow s + i$
- 13: *end for*